すまいる Smile

一度きりのガラスを形にしていく

Vol.100

齋藤　由香理さん
（土生在住）

土生で生まれ、高校卒業後、愛媛大学に進学。いったん就職した後、富山市の富山ガラス造形研究所でガラス工芸を学ぶ。現在、ガラス工房〇（マル）でガラス作品を制作している。

「今まで好きなことをたくさんやってこれたのは、両親が私のしたいことに反対せずに見守ってくれたから」

そう語る齋藤由香理さんは、2年前に構えた工房で、京都出身の夫・裕史（ゆうじ）さんと一緒にガラス作品を制作しています。

工房近くの実家で生まれ育った齋藤さんは、高校卒業後、化石や地質の研究をするため、理学部に進みました。好きなことを追求したい彼女は、卒論発表に向けて太平洋の岸壁に通い詰め、最終的には学部を主席で卒業し、研究室の先生からも大学に残るよう言われるほど研究熱心な学生でした。

卒業後、幼い頃から好きだった手芸の会社に就職した彼女は、勤務先のデパートでガラスと出会います。ガラス作家の展示会で、魚をモチーフにした作品を気に入りましたが、何事も突き詰める性格の齋藤さんは「もっとこんな感じにならないですか」とガラス作家に言いました。「手芸なら糸を抜けばやり直しがきく。でも、ガラスは一度きり。簡単には思い通りにならない」彼女はそう思っていました。

▼ガラス作品を制作中の齋藤さん。工房では一般の人もガラス体験ができる

しかし後日、ガラス作家が新たに作ってきた魚の作品は、彼女に大きな驚きを与えました。思い通りにならないと思ったガラスの魚は、彼女が求めた、その感じになっていたのです。

ガラスの魚からもらった驚きが、好きなことをとことん追い求める齋藤さんのスイッチを押し、彼女は今、ふるさと岩国でガラス作品を作っています。

工房では、彼女が色を決めるパーツを作り、裕史さんがガラスで造形します。思い通りにならないガラスを2人で形にしています。

「熱中できるものを見つけてほしい」

双子の母親でもある齋藤さんの願いです。彼女が両親からもらった思いは、母として子供たちに注がれています。

彼女はこれからも好きなことを追求し、何かに熱中し続けます。思い通りにならないからこそ、彼女の気持ちは熱くなり、楽しくなるのです。

▲写真下部の丸いパーツが透明なガラスに彩りと模様を与える

▲大学時代の地質調査の様子（高知県土佐清水市）